

英語を使う仕事から遠ざかって以来、気休めとは思いますが、ヒアリング能力維持のためにテレビのニュースを副音声の英語で聞くことがある。どういうわけか、通訳の英語の声に交じって元の日本語も聞こえることが多い。でもそのほうがどんな日本語がどんな英単語に置き換わったかがわかるので、それなりに勉強になる。

最近のスポーツコーナーでのこと。優勝争いをしてきた相撲の力士が、相手を凌いで一敗を守ったときのインタビュアーに答えて「よかったです」と言った言葉が、「I was happy」と訳されていたことがある。どちらかというと、Happy よりも I was relieved. とか I was satisfied. じゃないかなあ、と思った。次の瞬間、あのとときの記憶がふと甦った。

父の癌が発覚したのは、もう五年以上前のことである。戦前生まれ、海軍兵学校で終戦を迎え、戦後の高度成長期にびったり合わせるかのようにエンジニアとして一つの会社で勤め上げた末、バブル景気の絶頂期に無事定年退職をした、古き良き右肩上がりの時代を生き抜いた世代だ。家にまで仕事の書類を持ち帰り、夕飯の話題も会社の話ばかりで、子煩悩とは程遠い人だった。学校の出来事に耳を傾けてくれるわけでも、テストの成績を褒めてくれるわけでもない父のことが、子供の頃はさほど好きではなかった。

ようやく共通の話題が見つかったのは、文系の私が技術力で名高いメーカーに就職してからだ。技術畑を歩いてきた父は、私とその会社に入ったことがよほど嬉しかったのだろう。帰省するたびに、社員の私も知らないような技術記事の切り抜きなどを見せてくれている、昔と同じようにひときり専門用語を並べ立てて一人悦に入っていた。父の書斎の煙草臭さに辟易して、早く話が終わらないかと思いつつも、楽しいその父の様子に腰を上げる機会を逸することもしばしばだった。中間管理職として「会社」や「仕事」について深く考えるようになるにつれ、同じような経験を積んだであろう父に具体的な悩みを打ち明け、アドバイスを乞うことも出てきた。

定年後いくつか掛け持ちしていた技術嘱託の仕事も二つ一つと減っていき、煙草の脂で汚れた書斎に籠って読書とパソコンと回想録の執筆に勤しむことが増えてきた頃、癌を宣告され、即刻入院。十二時間の大手術となった。

幸い手術はうまく行ったが、医師から、家族にはもちろん本人にも「あと二年以上生きられる確率は五十パーセントです」と告げられた。「まさか」「でも」という気持ちが入り乱れ、とにかくもう少し頻繁に顔を見せに帰らないか、と思った。新幹線を使えば片道一時間の距離である。しかし、定期的に抗癌治療を続けながらも普通の生活に戻り、自宅の書斎で以前と同じようにパイプをくゆらす日々を送る父の姿にたかをくくりたい気持ちも手伝って、仕事の忙しさにかまけて三ヶ月に一度くらいの帰省がせいぜいだった。

手術から一年半後、具合が悪いと言って病院に行つたところそのまま入院。初めのうちは大したことはないと思っていたのだが、既に末期症状だった。来るべき時がついに来た。こうなったら仕事も何もなく、毎週末のように日帰りでお見舞いに行く。

入院したての頃は普通に話をし、普通に食事をしていたのが、モルヒネの量が増すにつれ、意識のぼやけが始まった。寝ていたかと思うと、突然、

「かかれ！」

「船から降りる」

江田島のことを思い出しているのだろうか。

「海兵？海は気持ちいいね」と言うと、

「余計なこと言うな！」

普段なら「ちよつと、そんなに怒鳴らないでよ」と怒るところが、意識が混濁しているわりにはちゃんと意思疎通ができることに、つい笑ってしまうこともあった。

入院して一ヶ月近くたち、看護疲れの母に代わって、会社を休んで病室に詰めているときだった。朦朧とする時間が増えて夢と現を行ったり来たりすることが多くなり、起きていても長い対話は期待できなくなっていた。それが、「お父さん」という呼びかけに、私の目をしっかりと見据えて穏やかな表情を浮かべた。少し掠れ気味の声で、それでもはつきりと、こう言ったのだ。

「よかった」

何がよかったのか、咄嗟にわからなかったものの、「…うん、よかったね」と返すと、嬉しそうにして、今度は、

「ありがとう」

思わずあふれてくる涙をこらえながら「どういたしまして」とおどけた声を出すと、照れたように身体をひねり、破顔一笑とはこのことか、と思うような笑顔を浮かべてくれた。

「私も、ありがとう、お父さん。お父さんからは仕事のアドバイスたくさんもらったね。お父さんは仕事が好きだったから、よかったね。お父さん、人生楽しめてよかったね」

話すうち、声が独り言のようにどんどん小さくなっていった。父の耳に届いているのかいないのか、目をつぶってしまった父の表情からは、もう具体的なアドバイスも相槌も読み取ることはできなかった。けれど、「よかった」という言葉の余韻だけは、確かにそこに漂っていた。

その後は、ますます夢のほうにいる時間が長くなり、支離滅裂な言葉の切れ端が投げ散らかされるばかりで、「よかった」や「ありがとう」はおろか、「会話」を成立させることさえ難しくなっていた。あの日からちようど2週間後、父は息を引き取った。母と兄夫婦が見舞ったあと、夜の付き添いをしようとして私だけが病室に残っていた、まだ夜も更けきらぬ亥の刻前だった。

「よかった」というあのとときの父の言葉は、どういう意味だったのだろうか。あの朝空が晴れていてよかったのか。好物のCCレモンを飲ませてもらったのがよかったのか。もしかすると、その朝のうわごとで言っていた「パイプをばらばらにして掃除して…」の続きで、きれいになったパイプが「よかった」だけだったのかもしれない。

真実は、彼がそれこそ墓場まで持って行ってしまった。

だから、遺された私は自分のいいように解釈するしかない。あれは、お天気のことでもパイプのことでもない、父の人生そのものが「It was good.」と言いたかったのだ。そう思いたい。「I was happy.」べ、「I was satisfied.」だったのだと。

実は、あのときのことを、いまだに母や兄には話せていない。いまわの際に居合わせたのが、家族の中で私一人だったことだけでも申し訳ない気持ちをしているのに、父の最期の優しい言葉を私だけが受け取ることができたのが、彼らには一生追いつけない抜け駆けをしてしまったようで、なんとなく後ろめたいのだ。

せめてものお裾分けに、近頃の私は、家族はもちろん友人や周りの人たちに、何かいいことがあると「よかったね」と言い、感謝したいと思ったときは「ありがとう」と口に出すことにしている。父に比べると、いささか安売りし過ぎの観がないわけではないが、あとで「あのとき言っておけばよかった」と後悔することのないように。